

コホーテク彗星 (Comet Kohoutek 1973f) について

香 西 洋 樹*

1973年3月7日 (UT) にドイツ・ハンブルグのベルゲドルフ天文台でコホーテクによって発見されたこの彗星は、4月末まで観測されたがそれ以後は太陽に近づき観測されていない。それまでの観測をもとにスミソニアン天文台のマースデンは次のような軌道要素を発表している。

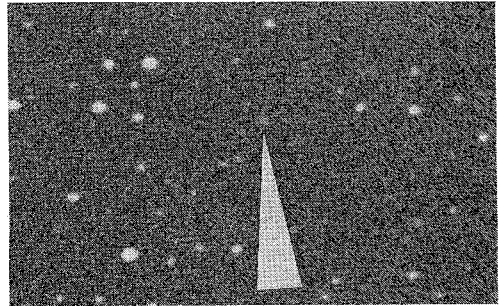
$$\left. \begin{aligned} T=1973\text{年}12\text{月}28.4751\text{ET} \quad \omega=37^\circ 8178' \\ \Omega=257^\circ 7774' \end{aligned} \right\} 1950.0$$

$$q=0.142368 \text{ AU} \quad i=14.3065'$$

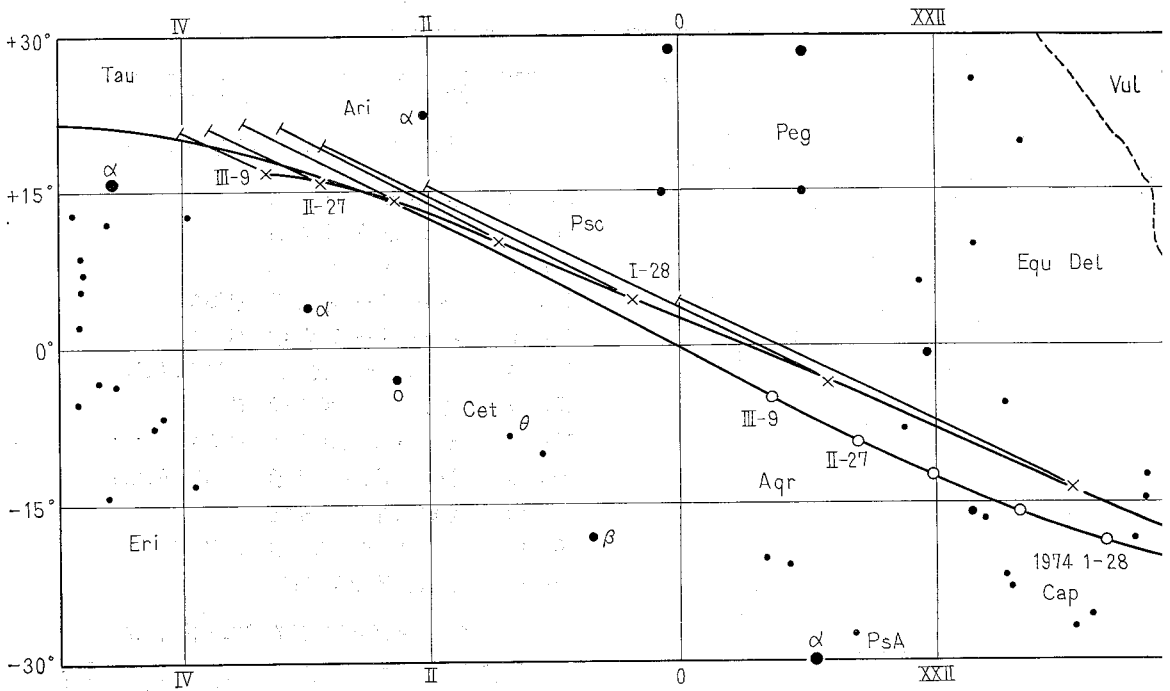
予報によると9月には光度約12等であるが、太陽からの離角が30度になって観測可能になるのは9月末であろう。(天文月報7月号参照)。

長期間の予報は観測期間の短いこともあって精度が良くないと思われるが、東京天文台での計算によると第1図のようである。図によると彗星は黄道のやや南を黄道にそって東へ動き、12月28日に近日点を通過する。近日点通過までは明け方の東天に見え、近日点通過以後は夕

方の西天に見えて来る。近日点通過後はかなり急速に太陽から遠ざかるので、1月中旬に最も見やすい状態になると思われる。表は東京天文台堂平観測所における近日点通過前後の状況で、彗星の出入りの時刻、天文薄明(太陽の伏角=18度)の始まりと終りの時刻、日の出入りなどが並記してある。最後の2行は尾が出た場合のことを考えて太陽と正反対の方向の天球上での方位角と、単位長さの尾を天球上に投影した場合の見かけの比率である。



1972年3月28日



夕方の空

* 東京天文台

る。すなわちガスの尾と呼ばれる直線状の尾が出来て、それが0.1天文単位の長さを持つとして1974年1月13日を例にすれば、天球上で北極を0度とし東廻りに測って65度の方向に見かけ上7度の尾が見えるはずであるとい

うことである。この表をまとめたものが第1図であって、太陽との相対位置、尾の方向と長さの比率がどのように変化するかを示したもので、これによりその日の状況をあらかじめ知ることができるであろう。

堂平における状況

1973		月	彗星の出	天文薄明	日の出	光度	尾の方位角	尾の長さの比率
XI	4		2 ^h 58 ^m	4 ^h 43 ^m	6 ^h 10 ^m	+8.7 +6.5	283°	1.3
	10	○						
	14		3 01	4 52	20	7.7	283	1.7
	24		3 17	5 00	29	6.6 +3.7	283	2.3
	25	●						
XII	4		3 52	5 08	38	5.2	279	3.1
	10	○						
	14		4 53	5 14	44	+3.3 -1.0	272	3.9
	24		6 16	5 20	52	-0.3 -6.4	262	3.5
	25	●						
1974		月	彗星の入	天文薄明	日の入	光度	尾の方位角	尾の長さの比率
I	3		17 ^h 56 ^m	18 ^h 13 ^m	16 ^h 42 ^m	-0.3	67	5.9
	8	○						
	13		19 42	20	50	+2.6 -1.6	65	7.0
	23	●	21 17	29	17 00	4.3	65	6.2
II	2		22 18	39	11	5.8 +2.9	67	4.5
	7	○						
	12		22 47	47	20	7.0	70	3.1
	22	●	22 56	56	30	8.1 +5.9	72	2.3
III	4		22 53	19 04	17 40	9.0	75	1.7

